

学位論文題名

ロシア経済史研究－19世紀後半～20世紀初頭－

学位論文内容の要旨

本論文は、ロシア経済史に関する従来の諸研究（マルクス主義、ナロードニキ主義、近代化論等々の側面からの諸研究）の成果を受け継ぎつつも、それら諸研究がはらんでいた一面性に対する批判に立って、当該期のロシア経済の全体像・問題点を、実証主義に基づいて、出来るだけ体系的に理解しようと試みたものである。

ロシア経済史を論ずる場合、「国際的契機」の重要性はつとに指摘されてきた。外国資本についてはかなりの研究がなされている。しかし外国貿易については、「捨象」されるか、補論的な位置づけしか与えられないことが多かった。しかし、基本的に「開放経済体制」をとっていた19世紀半ば～第1次大戦直前の時期は、経済における貿易の役割、又は経済と貿易との結び付きはきわめて大きかったと考えられる。ロシア資本主義の特質・問題点を把握しようとする際、外国貿易は、国内的諸要因と少なくとも同等の重要性を持つものとして、配慮されねばならないであろう。

ロシア農業・農民史研究においては、中央農業地方を中心とした地域に、そして旧領主地農民に集中する傾向があった。しかし、ロシア農業の中核だった穀物生産の中心は新興農業地域に移行し、又旧領主地農民とほぼ同数の旧国有地農民がいた。旧国有地農民は一般に、旧領主地農民よりも経済・生活状態が良かったと言われる。上記の傾向は、ロシア農業の遅滞性・農民の貧困性（ひいては国内市場の狭小性）をことさら強調する結果になっていると思われる。

従来、工業について論じる場合、国家の直接的な保護育成の対象となり、又外国資本が主に流入した重工業（特に鉄道業と鉄道関連諸工業）に議論が集中する傾向があった。しかしこれは、工業全体についてのバランスのとれた理解を阻むのはもちろん、国内市場問題や生活水準問題等々について、一面的な結論に導く原因となっているように思われる。

ロシア資本主義について、「転倒的な」、「跛行的な」といった形容詞がつくことがままある。これは先進資本主義（特にイギリスのそれ）の発達過程を絶対基準とした見方である。筆者はこの見方をとらず、ロシア経済にみられる様々な「後進性」を、ロシア資本主義の個性ととらえたい。

ロシアの貿易統計を分析すると、次の事柄が分かる。1860年代～70年代は、輸入に大きな変化が生じる。従来 of 主要輸入諸品目の比重が下がるのに対して、鉄関連製品（含機関車・車両）、石炭、綿花、化学製品等々の輸入が急増する。他方、主要輸出品目は、19世紀前半と基本的に同じであった。穀物の輸出が増えるが、ライ麦・エン麦を中心としたものだった。結果として、貿易収支は大幅赤字となる。1880年代～90年代前半になると、輸出構造が変わる。従来 of 主要輸出諸品目に代わって、特に小麦・大麦、そして砂糖、バターなどの輸出が増える。食料品（穀物）輸出体制の成立である。貿易収支が黒字基調に転換する。以後、ロシアの貿易のあり様は基本的に不変であるが、大戦直前期に向かうにつれて、輸出構造に多様化の傾向が生じる。換言すれば、穀物（特に小麦）の比重が低下する。又輸入では、①綿花だけでなく、羊毛、原料絹などが増え、②鉄・製品が後退して非鉄金属・製品が増加し、機器の中では工業用機器よりも農機具が増え、③化学製品輸入の中心が染料完成品から他の製品（含半製品、素材）に移る。貿易収支は黒字基調を維持するが、黒字幅は縮小する。ロシアの貿易相手の中で、ドイツの比重が益々大きくなる。

農業に関する諸統計が示すのは、次の点である。農業の中心であり続けた穀作の重心は、1880年代を境に、旧来の中央農業・ヴォルガ中

流地方（ライ麦、エン麦）から新興の新ロシア・ヴォルガ下流地方など（小麦、大麦）に移動していく。これら地方にはドイツ人入植者なども多く居た。輸出をはじめとして、穀物の商品化が進行する。更に、20世紀に入ると、北カフカース、ステップ辺境、シベリアなどにも、穀作が広まる。土地所有においても、変化が生じる。穀物の収穫は順調に伸びる。ただ、その中で、小麦の比重が大戦に向かうにつれて減退する。新興穀作地方では、粗放的な農法が残存したが、近代的農機具や役畜を積極的に用いることによって収穫を増やし、輸出向・国内向供給の増進という課題に答えてきたが、大戦直前期ともなると、そのような方式が限界に達しつつあった（特に新ロシア地方で）。

工業の諸統計の分析が示唆するのは次の如くである。「大改革」の中で、鉄道建設や鉄道関連諸工業が、国家の直接的な支援の下、外国資本の流入も得て、急速に進展する。但し、工業労働者の過半を占めた軽工業部門（繊維工業や食料品製造業）も、19世紀半ば以降（鉄道関連諸工業が沈滞する80年代、恐慌と不況の時期とされる1900年代においても）、順調な発展を示す。20世紀に入ると、特に大戦直前に向かうにつれ、①綿工業だけでなく、羊毛工業、絹工業などが多様な展開をみせ、②鉄道関連以外の一般機器の製造が増え、③製鉄業が安定成長に入ると共に、非鉄金属生産・加工業が発展し始め、同様に④化学工業も発展し始める。

以上の分析諸結果から次のように言えよう。ロシアは、クリミア戦争の敗北を契機として、大国としての地位からの脱落という危機の下、「大改革」を推進する。急速な工業化の影響は輸入貿易に直ちに表れるが、輸出構造は旧態依然たるものだった。結果は、貿易収支の大幅赤字（そして財政赤字）となる。袋小路から脱し得たのは、80年代を境とする食料品（穀物）輸出体制の成立によってである。小麦・大麦を中心とする穀物輸出は、世界穀物市場の動向に対応したものであり、ロシア国内の穀物生産の変化を伴っていた。貿易収支の黒字基調が定着し、露独通商条約体制が整う中で、ロシア経済はそれなりに順調に発展する。

大戦直前期には、工業が一層多様な展開を示すようになり（それは輸入貿易にも表れる）、穀物の作柄も良好だった。しかし、同時に、新たな問題が生じつつあった。経済発展は穀物（特に小麦）の国内消費を増やしたが、従来の穀物生産方式は限界に達しつつあった。結果として、穀物輸出体制が揺らぎ始める。新しい輸出体制の成立の見通しは立っていなかった。それまでの工業化を支えていた輸入（特に工業完成品）が、ロシア工業の一層高度な発展にとってかえって桎梏と化しつつあった。このような矛盾は、最大の貿易相手であるドイツとの間において集中的に表れる。露独通商条約の改訂に向けての準備作業が始まる中でみられるロシア側の「いらだち」は、そのような状況の表れと考えられる。ロシアは、一層高度な経済発展に向けて、新たな路線を模索せざるを得ない段階に達しつつあった。

学位論文審査の要旨

主査 教授 石坂昭雄
副査 教授 牛山敬二
副査 教授 荒又重雄
副査 教授 加来祥男
副査 教授 鈴木健夫 (早稲田大学政治経済学部)

学位論文題名

ロシア経済史研究—19世紀後半～20世紀初頭—

本論文は、1861年の『大改革』から第1次世界大戦にいたるまでのロシア経済の発展を、様々の新しい史料や膨大な統計資料を活用しつつ再検討し、これまでの内外のロシア経済史研究では通説となってきた、その工業化の「転倒的」、「跛行的」性格、あるいはロシア経済の著しい後進性、外国資本への従属性を強調する歴史像にたいして、様々の積極的発展の側面を明らかにしつつ、新しい全体像および問題点を提示することを意図したものである。その際、著者は、とりわけロシア経済の国際的契機、とりわけ外国貿易と国際収支を重視し、その推移と国内の経済発展との関連を念頭に置きつつ分析を進めている。

本論文は全体で6章よりなり、問題提起の序章と総括の終章の他、第1章が貿易全体を、第2章はそのなかで20世紀初頭に最も大きな問題をはらんでいた独露貿易を分析する。さらに筆者は続いて第3章において、ロシアにおける当該時期の農業問題を、第1節において全ロシアの穀物生産と生産性、土地所有を分析し、第2節では、1880年代以降、ロシアの主要な輸出穀物、小麦の主産地として発展して行く新ロシア地方の農業構造に焦点を当てている。さらに第4章では、詳細な工場統計により、19世紀後半および20世紀初頭のそれぞれについて、各産業部門あるいはその地理的分布を詳細に追跡している。

以下、本論文の構成に従って、筆者の積極的主張点およびロシア経済史研究にたいする積極的寄与について述べることにする。本論文のいわば要とでもいうべき部分は、ロシアの対外貿易分析である。筆者はこれを3つの時期に区分してその特徴を論ずる。①周知のようにロシアはかのクリミア戦争での敗北によって大国の座から脱落する危機に見舞われ、『大改革』を推進しつつ、工業化と鉄道などその基盤の整備に乗り出すが、そのことは直ちに鉄道関連資材や機械、工業原料の輸入の急増をもたらし、他方主要輸出品目はライ麦、燕麦を中心としたものであり、こうした輸入増を賄うことができず、貿易収支は赤字を続けた。②その転換は1880年代であり、高率の保護関税のもとでの鉄道資材の国産化の一方で、新興の新ロシアの小麦、大麦など、さらに砂糖、バターなどの輸出農産物が登場したことで、工業化に必要な機械の輸入の増大にもかかわらず、ロシアは大幅な貿易黒字を獲得できた。③ただし、第一次世界大戦の直前には、工業発展のための機械、半製品、原料輸入が増大する反面、ロシアにおける小麦生産の伸びが鈍化し、また国内消費の増大と相俟って輸出における小麦の比重が減退し、また世

界市場では諸生産地との激しい国際競争に出遭った。こうしたなかで、ロシアの貿易収支の黒字幅は減少し、とりわけ最大の貿易相手であるドイツにたいしては、穀物輸出の伸び悩みと機械・半製品の大量輸入による貿易赤字を出していた。

筆者は続いて、農業分析を扱う第3章において、前章で注目された新興農業地帯である新ロシア・ヴォルガ下流地域における穀作の発展を分析する。これまでロシア農業史の分析の中心は、農奴解放の結果として、農民への分与地の切り取り、「雇役制」下での高率地代、農民の貧困と農民運動の頻発など激しい矛盾を抱えた中央農業地方の旧領主地農民に集中してきたのにたいして、筆者は、全国的な農業統計の分析によって、これら新興農業地帯の重要性を指摘する。そしてさらに、国有地が大きな比重を占め、封建遺制も非常に希薄であったこれら地域が、とりわけドイツ人などの入植者が培った新しい農業経営技術、とりわけ冬小麦栽培によって、ロシア農業の新しい発展を支えたことを、農業経営や土地所有、定住形態など側面から詳細に分析している。

筆者は、第4章において、様々の工業＝工場統計の包括的な利用のうえに、これまでのロシアの工業発展についての通説的理解を批判しつつ、その実態を明らかにしようと試みる。すなわち、確かに『大改革』以降、ロシア重工業は、保護関税や国家の直接的支援のもとに、外国資本の流入および外国の企業の参入に支えられて急速に発展し、とりわけ1890年代以降ロシアの工業化の牽引力となるが、それは同時に鉄道へ強度に依存した脆弱な構造を示すものでもあった。それにたいして、筆者は、20世紀に入ると、鉄鋼業における鉄道関連需要の比重は大きく下がり、ロシア鉄鋼業はそれなりに一般機器などの民間需要に支えられながら発展を続けることができたこと、また工業労働者の過半を占めた綿工業などの軽工業が、鉄道関連工業の沈滞する1880年代、恐慌と不況の1900年代にも順調に発展し、さらに毛織物工業などなど多様な繊維産業が成長していったことを指摘しながら、帝政ロシアが、高率の保護関税障壁に護られていたにせよ、国内市場を基盤にかなりの工業化を達成しえたことを強調する。

そして、最後に著者は、このような工業化と外国資本輸入を支えてきた、南ロシアなどの新興農業地帯の小麦輸出の伸びの鈍化と、工業化自身が生み出した、機械機器の輸入、とりわけドイツからの輸入の増大と対ドイツ貿易赤字の増大のうちに、ロシア経済の大きな危機要因を指摘する。

以上のように、本論文は、筆者の20年にわたる19世紀後半から第一次世界大戦にいたるロシアの経済発展についての詳しい実証研究、とりわけ膨大な資料および統計の分析に立脚して、国際的関連を重視しながら、これまでの研究が描いてきた停滞的・跛行的な経済発展像にたいして、ひとつの新しい全体像を提示し、そこから、帝政ロシアが達成した経済的成果とそれによって生まれたロシアの社会・経済が保有していた様々の将来への発展への様々の可能性を検出したものであり、その点をロシア経済史研究にたいする大きな貢献として評価できる。ただし、口述試験においても指摘されたように、他方で、これまでの研究史上数多くの成果が積み上げられてきた、ロシア社会・経済の大きな矛盾や危機、とりわけ農業土地問題の存在は、なお否定しがたく、現実にはそれが1905年、1917年のロシア革命を惹起したとすれば、それを、筆者の明らかにした発展的・積極的側面とどのように整合させながら全体的展望を描くことができるか、かならずしも明示されてはいないし、20世紀初頭の独露の経済的摩擦を第1次世界大戦とどこまで関連付けることができるか、さらに、新ロシアの農業生産力が果たしてアメリカ合衆国などの先進農業国の国際的技術水準から見て、どの程度高度であったかといえるのか、などの諸点については、なお今後の一層の精密な論証を必要とするものと認められる。

しかし、これらの問題点や残された課題は、本研究のすぐれた成果と学界にたいする寄与の評価を決して損なうものではなく、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（経済学）の学位授与に十分に値するものであることを認め、研究科委員会にその旨報告するものである。